

Title	石川忠雄先生追悼座談会
Sub Title	
Author	小田, 英郎(Oda, Hideo) 山田, 辰雄(Yamada, Tatsuo) 小此木, 政夫(Okonogi, Masao) 国分, 良成(Kokubun, Ryosei)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2008
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.81, No.6 (2008. 6) ,p.149- 168
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別記事 : 石川忠雄先生追悼記事
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20080628-0149">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20080628-0149</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 石川忠雄先生追悼座談会

国分 本日、先生方には、石川忠雄先生を偲んで『法学研究』に特別の企画として「追悼座談会」を掲載したいという趣旨でお集まりいただきました。

今日は石川先生にとくにゆかりの深かった先生方における越えただきまして、先生がとくに法学部の研究と、教育にどのような形で貢献されたのか——それは法学部だけではなくて、広く慶應義塾全体ということになるかと思えますけども——ということについての話を中心に行いまして、追悼に加えて、さらに今後の法学部への期待なども最後には少しお伺いできればと思っております。

私が大学に入ったのは一九七二（昭和四七）年です、

名誉教授 小田英郎  
名誉教授 山田辰雄  
法学部教授 小此木政夫  
法学部教授 国分良成  
(司会)

石川忠雄研究会に入ったのがその翌年の一九七三年です。石川先生はすでにそのとき法学部長になられていて、今の私より若かったのです。そして一九七七年に塾長に就任されました。私が大学院の修士二年のときでした。つまり、私自身は学生としては法学部のなかで石川先生の薫陶を受けたのですけれども、法学部の教員としてはその場におりませんでした。そういう意味で、私は石川先生が法学部のなかで研究と教育をどのようににされていたのかを、先生方からむしろ色々とお聞きしたいというような関心から、今日は司会をさせていただきます。

まずはじめに、三人の先生方から簡単に、石川先生と

どういう形でつながりを持たれていたのかについてご紹介いただいで、それとの関連で少し石川先生の思い出を語っていただければと思います。まず、小田英郎先生からお願いいいたします。

先生との思い出

小田 それではご指名ですから、トップバッターということでお話いたします。私と石川先生との出会いは大学三年になったとき、昭和三〇年四月、ちょうど石川先生が教授になられたときです。私は石川ゼミではないのですが、昔は一年から四年までずっと同じクラスで過ごすという制度になっていました、それで石川先生がわれわれのクラスの英書講読の担当者だったんですね。当時は英書講読とは言いませんで、「研究指導Ⅱ」と言っていました。それで一年間英書を先生に教えていたかどうかということ、テキストのタイトルも覚えていません。*Soviet Policy in the Far East* とごうマックス・ペロフの書いた本で、毎回五ページづつは必ず進む。石川先生が巧妙なのは、私に「君には必ず毎回当てるからね」(笑)と。そうしないと途中でみんなもうやって来なくなるの



で、人のプライドをくすぐりながら、「必ずやるからね」と言って五ページづつ稼ぐのです。実に巧妙ですね。私はその手は使いませんでした。

けど(笑)、そういう出会いがありました。

ただ、石川先生は翌年ハーバードに留学をなさることになって、昭和三一年度、四年の年は別の先生に替わってしまわれたので、たった一年しか学部時代にお世話になりませんでした。けれどもその後大学院へ進学して修士課程で石川先生に指導していただくことになりました。たぶん大学院で石川先生に正式についたのは私が最初だと思えます。徳田教之(故人・筑波大学名誉教授)さんは先輩で実質的には石川先生の最初のお弟子さんですが、当時の大学院の制度では、先生はまだ指導資格がなかったのです。確か英修道先生が徳田さんの指導教授だったと思えます。

小此木 徳田先生とどのくらい違うのですか。

小田 徳田さんとは二年違いです。



小此木 徳田先生は確かゼミの一期生だという話ですよ。

小田 そうです。だから徳田さんは石川先生が教授になる前の、助教の最後の二年間、石川ゼミで過ごしたのではないですか。徳田さんと私はそういう出会いで、大変お世話になりました。

国分 山田先生いかがですか。

山田 以前別のところに書いたことがあります。最初は最初法律学科に入りました。一年生のときにちょうど石川先生の『中国共産党史研究』が出版され、その頃から中国に興味を持っていましたので、二年から政治学科に転科して、三年から石川ゼミに入りました。あとはずっと石川先生に学問的にも個人的にも指導を受けました。ご存じのように先生は、常任理事や学部長になられたの

が比較的早かったのです、私は助手や講師時代に石川ゼミの師範代みたいなことを結構長くやり、助教になったときに独立して自分のゼミを持ちま

した。先生は常任理事として忙しかったために、私は先生の中国政治史の授業を専任講師時代に代講したことがあります。石川先生の指導によって後に中国研究から中東研究に変わりましたが、富田広士君がその時の最初の学生でした。

小此木 私は研究会ではじめてお会いしたわけですが、私も、出発点から色々な偶然の要素があって、あとになってみると、あれがこうなっていたらどうなっていたのだろうかというようなことを、考えざるを得ません。ちょうど先生がたぶん常任理事になられた年だと思うのです。石川ゼミに入るためにはサブノートを何冊も書かなければいけないということで、早めにそういったものに着手していたら、「今年はゼミ生を採りません」という掲示が出たのです（笑）。理事になられてよほどお忙しかったのでしょうかね。私は非常に残念であったけども諦めざるを得ないかと思っただけですが、同期の仲間のなかにもそういう意味では非常に積極的な男がいて、先生に談判に行つて「署名運動をやる」と脅かしたのです（笑）。それで先生がゼミをやってくれたので、ゼミ員になることができたのです。しかし、そのときから理事室でゼミ



をやられたり、あるいは、自宅に呼んでいただいたりという、そういう状態でした。

小田 変則的な授業だったわけですね。

小此木 ええ、変則的だったですね。それは大学院に入ってから同様だったのですけれども。

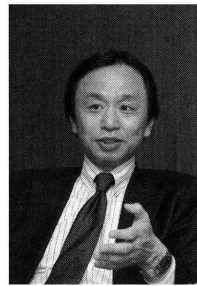
国分 私の場合は大学一年のときに、山田先生の講義を履修していたのですが、そのときにゲストで石川先生が来られたのです。

山田 ああ、そういうことがあったかもしれないね。

国分 ええ、何回かゲストで来られた。それでその講義に感動して。いや山田先生に感動しなかったわけではなくて(笑)。

山田 そんなこと気を遣わなくていいよ(笑)。

国分 残念ながら山田ゼミに入らなかつたのですが、石川先生のゼミにこれが入ろうと決意したのです。石川ゼミは条件が厳しかったので必死にやりました、今は三年から四年ですけれど、あのときはゼミは二年から三年



だったのですね。二年間石川先生のゼミで勉強し、そしてそのあと大学院に入れていただいた。ただ、その直後に私の修士二年

小此木 先生が塾長になられましたので、実質的にはそのあと山田先生のところへ里子に預けられ、あと小田先生や今年亡くなられた太田俊太郎先生などの地域研究の先生方にお世話になり、その後大学に残らせていただいたという経緯があるわけです。

小此木 ちよつとその辺で補足的に入れておいたらいいのではないかと思つて、あえて口を挟むのですけれども……。先ほど話に出た徳田先生のほかに、平松茂雄さん、小島朋之先生がおられました。平松さんは先輩でも指導を受けました。小島さんは昨年お亡くなりになつて今日この席にはいらつしやいませですが、ちよつと小島さんあたりが山田さんと私の中間ぐらいですね。だから石川ゼミ全体で見ても真ん中あたりではないかという気がします。

山田 平松さんは先輩ですが大学院時代一緒でした。

大学院時代石川先生の下で中ソ論争について大変すぐれた論文を書かれ、当時としては異例でしたが『法学研究』に掲載されました。平松さんが中国の軍事問題に本格的に取り組まれたのは、一九六九年から二年間香港総領事館に特別研究員として滞在され、さらに防衛研修所で仕事をされるようになったからだと思います。それから、小島君と石川先生の関係を言っておくと、もうそのときは石川先生は理事をやっておられました。それで小島君が石川先生のところへ行つて中国の勉強をしたいと言ったのです。私は大学院の学生で、石川先生が私に「面白い学生が来たから、君、面倒みてやれ」と言われて。

小此木 そのときもうすでに理事をやられていたんですか。

山田 そうだと思います。

小此木 先ほどの話に戻ると、きつと理事を何年かやられて、同時に教えられていて大変なのでゼミをやめようと思われたんですね。

山田 それは学生運動とも関係していたのかもしれない。先生の学者としての生活が相当被害を受けられたこ

とがありました。

国分 小島朋之さんは、私が学部のとときの大学院生の長老格で、私などはそれでびしびし指導されたという。そういう関係です。あこがれの存在でしたね。

さて、これで石川先生と私たちとのつながりが歴史に沿って明らかになりました。次に研究活動面での貢献に関してですが、それはもちろん中国共産党史研究ですが、これはまさに日本の現代中国研究に一つの新しい風を吹き込んだ内容だったというふうに思います。

同時に慶應義塾の法学部において、とくに地域研究の発展に尽力されたと記憶しております。石川先生がアメリカに留学された当時、アメリカで地域研究が非常に盛んだったわけですけど、この手法を昭和三二年か三年に政治学科に、地域圏研究という形で導入された。その後地域研究センターというのが慶應義塾の一二五周年を記念して設立されましたけど、そのときも初代所長が小田先生でした。そのあたりの石川先生の地域研究への貢献を、少しお話いただけますか。

## 地域研究への貢献

小田 私はさきほど申し上げたように石川ゼミの出身でなくて、国際政治の内山正熊先生のゼミの出身ですが、石川先生のご指導をいただいて地域研究にしたいに関心が向いていきました。ところが大学院に入るときに、地域研究の教授がほかにいないのですよ。それで石川先生を選んだわけではないのだけど、たぶん先生もそういうことはよくご承知だったので、私を弟子に採ってくださいだったので。最初は中国の旧新疆省ですね、いまの新疆ウイグル自治区の一九三〇年代のことなどをやっていたのです。石川先生は、自分はただ単に中国研究者としての慶應義塾でいろいろ貢献するだけではなくて、慶應義塾のなかで地域研究というのをどんどん広げていきたいと思われた。これは慶應義塾の一つの特色になりうるだろうし、しなければならぬだろうというふうなたぶんお考えになっていたと思うのです。

いま国分さんのお話にも出てきましたけど、先生は昭和十一年から三十二年にかけてハーバード・イエンチン・インスティテュートに留学しますよね。で、結局一年終わってもう二カ月ぐらい滞在を延ばして、帰ってこられ

たようです。ですから私の記憶が間違いないければ、その経験をもとにして、さっきお話に出た地域圏研究というものもを複数、法学部政治学科のいわば基幹科目として置いていこうと思うようになった。そしてそれを具体的な形にまとめ上げたのは多分三三年だろうと思えますけれど。そこでその後、長年続いた政治学科のカリキュラムの原型、とくに地域研究の原型ができた。

先生は中国だけではなくて、そのほかの地域の研究も慶應義塾のなかにぜひ発展させたいという思いがありました。すでに昭和三三年度には当時のソ連研究は中沢先生のものでありましたね。それから、賀川先生のラテンアメリカ研究もあつたわけです。遠峰先生の、あの頃は中東と言わないで中近東と言っていましたけれど、それもあつた。それ以外に石川先生の手で最初に中国以外の地域研究を先生の弟子に担当させるという形で置いたのが私、つまりアフリカ研究だつたろうと思うのです。その前に松本三郎さんの東南アジアがありますけれど、松本さんは英先生のお弟子さんなので、石川先生系統では、私のアフリカというのが最初かもしれません。そこまで視野を広げられて、ずっとその先のことも考えて、そのあ

とも小此木さんの朝鮮研究も出るし、非常に早くから慶應義塾のなかでのそういう遠大な地域研究発展のプランをつくっておられた。非常に先を見る目があつたという感じがします。

もう一つ、ついですが、私がアフリカ研究をやらせてもらつて非常にラッキーだったのは、あんまり人に教わるのが好きではないので(笑)、先生がいて、兄弟子がいてというのは窮屈なのです。そう言つては失礼ですが、博士課程時代に指導教授になってくださった伊藤政寛先生だつて石川先生だつてアフリカのことは何もご存じないわけですから、「もう好きにやれ」と言われて好きにやつて、傍から見て成功していると見られるかどうかわかりませんが、私自身はよかつたと思つています。先生に今でもその点では感謝しています。

小此木 ベンジャミン・シウオルツの『中国共産党史―中国共産主義と毛沢東の抬頭』の訳ですが、小田先生も一緒にやっていますね。やはり石川先生がハーバードへ留学されたことなどの影響はあるのでしょうか。

小田 私は、あれは先生が偉いと思う。昔の話ですけど、大体弟子が翻訳をやつて、先生も名前を連ねると

いうのが、よくあるパターンだったのです。ところがあれは石川先生は全部訳したのを持つていたのです。

小此木 そうだったんですか。私は知りませんでした。

小田 ところが、私が可愛かつたのか、あるいは翻訳にやや自信がなかつたのか、それはどちらか知りませんが(笑)、「小田君、これをチェックしながら訳してみてくれ」と。

国分 そうだったんですか、それは私も知らなかつた。

山田 先生は必ず、翻訳すると読み合わせをやられます。その読み合わせを、根岸毅君と私が手伝いました。

小田 普通だつたら、仮訳とはいえ自分が全部訳していたら、最後まで自分でやるでしょう。あとは、訳者の名前も自分の名前だけでいいはずですね。それをまるで、私のほうが指導教授みたいなもので(笑)。

国分 そうですね、確かに小田先生が全部やつたように見えますね。

小此木 そうそう、僕もそう思つていた(笑)。

小田 自分のために言つと、直すべきところは直してまずけれどね(笑)、それは私も共訳者としてちゃんと役割を果たしていますが、それでも石川先生はほんとう



に偉いなと思って。

小此木 アメリカの中国研究を取り入れるということに、相当熱心だったということですかね。

小田 そうでしょうね。

小此木 あの当時そういう方はほかにはいなかったですよ。

小田 これは山田さんの言うべきことかもしれないけれど、われわれが大学院生の頃によく聞かされていたのは、戦前、戦中の日本の中国研究というのは、要するに当時の「中国通」の人たちがやっているもので、たとえば横文字はほとんど使わず、中国語だけ使った研究だった。欧米諸国の中国研究がまだ盛んでなかったからかもしれない。しかし第二次大戦後は逆で、日本も含めて西側の研究者は中国へ入れず、他方でアメリカの中国研究が西側世界の中国研究全体を研究方法も含めてリードするようになっていった。当時石川先生も中国へ行っただけでいいけども、アメリカの中国研究のいいところを取り入れながら、場合によっては香港から遠く大陸を覗いて、現地感覚に近いものをつかみながら、中国研究を進展させていくというやり方にならざるを得なかった。

戦後の中国研究者と戦前の中国研究者との間に、非常に大きなギャップがあるというわけですね。

山田 小田さんがいま、法学部の地域研究の発展を概観してくださったので、私は小田さんの話を受け継ぐ形で、石川先生の中国研究について気がついた点を申し上げます。ご存じのように先生の『中国共産党史研究』は、中国共産党を中心にしながら、コミンテルンとかソ連との対立、対抗関係を軸にして書かれたのです。一九五〇年代の日本における中国研究のなかでは、やはり中ソ一体論が強かった。そういうなかであえてそのような視点を持つことに重要な意味がありました。先生は別に政治的にやられたわけではなく、学問的にやられたのですが、それは一つ重要な、優れていた点だと思います。そのこととはおそらく、先生のアメリカの中国研究に対する評価とも関わっていて、小田さんが訳されたシュウォルツの本はその一つだと思います。

先生は、アメリカの中国研究の成果を積極的に評価されようとしていました。それ自体大変なことでした。当時多くの日本の中国研究者は、アメリカ帝国主義者の研究という目で見えていましたので、それを学問的に正当に

評価しようというのは、先生の一つの優れた見方だと思います。そして共産主義を扱うなかで、先生は中国共産党の根底にあるナショナリズムの要素を非常に強く意識されていたと思います。マルクス・レーニン主義の受け入れ方自体が、中国のナショナリズムと結びついていたという見方です。この考え方は、単にそれだけの問題ではなくて、先生が中国・中国共産党を見る場合常にその根底にあったと思います。

そういう意味で、先生はまずアメリカへ行って勉強することをすすめられました。多くの地域研究者は、私も含めて結構アメリカへ留学しています。これは二つ理由がありました。一つは、当時なかなか中国へ行けないから、アメリカへ行って中国研究を見てこいということでした。もう一つの理由は、アメリカの社会科学の方法を学んできなさいということでした。これは余談ですが、留学の前に先生から、まず英語がうまくなってくればそれでいい、どうせ行けば勉強するのだから、あんまりガツガツやることはないといわれました。先生はあまりガツガツやることでノイローゼになってしまうことを心配されていたと思うのです。しかし、あまり勉強しなくて

いいとは言われませんでしたけれど（笑）。まあ英語がうまくなればいいんだから、などと言って送り出してもらったという記憶があります。

国分 私の場合は八〇年代はじめだったものですが、どちらに留学しようかと迷いました。中国留学というのはまだ非常に限定的でしたけれども始めていた。しかし、やはり先生は私に対しても、まずアメリカへ行ったほうがいいということを、強く勧められました。方法論をきちんとやって、英語もやってきなさい、それが将来につながるということを言われてました。今考えてみると、私にとっては、非常にそれが大きくその後につながっていますね。

山田 結果的には、慶應の中国研究は、もっと広くいて慶應の地域研究は、まず西の社会を見たいうえで、広い視野をもって自分の地域を、東の社会を見ようというのがあって、この伝統は今でも続いていると思います。

小此木 当時の共産圏研究というのは、何か研究者が対象と一体化しているようなところがありましたね。政治的な運動をやっている人たちが研究をやっているようなところ、そういう重なりがあったように思うのです。

ですから、私が先生から学んだ一番大きなものというのは、対象に踏み込みながらも、常に距離を保っていないければいけないという、そういう姿勢ですね。これは大変重要なことだったと思うのです。

実のところ、最初に私は北朝鮮研究から始めましたから、石川先生が中国研究をなさっている手法というのを模倣しながら、対象をずらすような形で行ったわけです。当時の研究者はそう多かったわけではないですけど、みんなマルクスやレーニンや毛沢東の言うことが正しいと思つたのと同じように、金日成の言うことを正しいと思つている人が多かった。だから踏み込みながらも、しかし距離を置いているという研究手法というのは、ちょっと変わったタイプの人がやり始めたというところで、当時からあまり歓迎はされなかつたのです。しかしその後、徐々にそれが主流になっていったということではないかと思うのですけれど。

うのか、どういう分析のメスをどのように使うかというのは、石川先生の研究、『中国共産党史研究』のなかに収められたあのような研究から最初はほとんど学んでいます。だから石川先生の道具のなから色々なメスを借りてきて分析をしていくと、やがてそれは自分のメスをきちんとつくつて持てるようになる、というようなことはありましたね。

#### 国際政治への眼

国分 私も世代的にはもう少しあとになるので、石川先生の研究から学びとつた分析手法の一つは、中国を見る視点として、権力分析というのが中心にあります。慶應義塾のその後の中国研究もある意味では、どのような研究をやるうが、やはり権力に関する分析というものから離れないという感じがします。それと同時に、先ほど山田先生が言われたようなナシヨナリズム、そして同時にその背後にある中国人の行動様式などといったことをかなり強調されたという記憶があります。

もう一つ、私の世代になってくると、日中国交正常化が一九七二年にありましたので、その頃から国際政治、

あるいは日中関係に対する具体的な政策も含めた研究のなかに、先生がかなり積極的に入れられました。ですからこの頃の日中関係の研究と、それから具体的な政策提言などが有機的に関連していった、ちょうどその時期ではないでしょうか。ですから学問研究というものをふまえて、世界的に活躍されていく過程を目の前で拝見したような、そういう感じがしました。

小此木 石川先生の慶應義塾における業績が、地域研究にあることは間違いないのですが、いま国分さんが言われたあたりから、先生はやはり国際政治というものに関心を持つようになったのですね。それで大阪市立大学から神谷不二先生を招聘したわけです。それまでにも内山正熊先生が西洋外交史の視点から国際政治を論じていましたし、それは田中俊郎さんに引き継がれていますが、私は神谷先生の助手にトレードされて、地域研究と国際政治の二足の草鞋を履くような形になりました。ですから私の朝鮮戦争の研究などはほとんどアメリカ研究みたいなことだったので。

そのあと、松本三郎、池井優先生の門下生に薬師寺泰藏さんが加わって、六、七人の国際政治グループという

ものが今は形成されているけれども、出発点の一つはやはり石川先生なのです。だからそれが非常に大きな業績だったのではないかといいふうに思います。

小田 確かに地域研究を超えて、というところがあるかもしれない。「私のみた日本外交」という本もありますね。

#### 研究者を育てる

国分 研究と同時に教育の側面もあろうかと思えます。先ほど言われたような地域研究の講座の設置とか、もちろん現代中国を中心とした講義、さらに石川ゼミ、こういう面で何か思い出に残るようなことはありますでしょうか、小田先生いかがですか。

小田 私たちの年代のことですけれど、私は、石川先生は非常にモチベーションを高めさせるのが上手だと思ふ。

山田 その通りですね。

小田 私は、昭和三四年に大学院に入ったのです。その年に先ほど言った徳田さんも銀行をやめて戻ってきた。それから私と一緒に池井優君だとか、あるいは内山秀夫

君だとか、そういった人たちも同じ学年にいたのです。そうしたら先生が「翻訳やろうや」と言って、有名な *The Annals of the American Academy of Political and Social Science* の、一九五九年、つまり昭和三四年一月号の「中国特集」を取り上げたんです。Contemporary China and the Chinese というタイトルで、一四本の論文がそのなかに収録されて、ハワード・L・ポアーマンという有名な中国研究者が編者でした。それを、日本外政学会というところから先生が頼まれたからでしたが、みんなで訳そうやと言って、翻訳をやりました。一四本の論文ですから、一人が三つぐらい論文を受け持って、それが出たのが同じ昭和三四年の一二月なんです。大学の修士一年のときに自分の名前がきちんと著者の横に並んで出るというのは、ものすごく嬉しいことなんですよ。それを先生がやってくださって、石川忠雄監訳で『現代中国—その実体と分析』という本になったのです。三カ月後の三五年三月には再版が出ましたから、かなり広く読まれたと思います。

山田 僕も読みましたよ。

小田 ああいうことをやってももらえるというのは、大

学院生としてはものすごく嬉しいのです、身の程知らずに喜んでしまうのですよ。でもそれがまたエネルギーになって、研究への取り組みの熱意がまた一段と高まりますから、非常に上手だったと思う。さっきのシユウォルツの本の翻訳だって、自分でやってもいいわけでしょう。それをわざわざ、君、これを参考にしながらでいいから、全部原稿を作り直してくれと。当時先生が多忙だったこともあったでしょうが、こちらのモチベーションを高めるといふような意味もあったのだらうと思うのです。それから、フレデリック・ノサールの『発信地—北京』の翻訳もそうです。

山田 あれは僕も手伝いました。

小田 あれは私が全部訳して、山田、根岸(毅)両君に読み合わせをお願いしたのです。当時、私はもう大学院生ではなく、助手になっていましたが、とにかく若い人を乗せるのが上手。それと面倒見もとてもよかったです。それは私などが、幸い大学に残してもらえて、講師、助教授、教授といくわけですが、そのプロセスで色々お世話になることがたくさんあり、その肝心なところで必ず石川先生が登場して、よい方向に持っていくてくれる。

たとえば、あるとき「君、アフリカへ行ってないけれど、それはまずいだろう」とおっしゃった。私はあまり外国へ行くのが好きではないので（笑）、当時アフリカへはしばらく行ってなかった。ですから確かにまずいな、それは、と思っていたら、先生は、古い卒業生の方からの、塾への寄付金の一部をもらってきて、「これで君、行きなさい」と（笑）。

国分 本当ですか。

小田 その代わり、二カ月以上にわたって一〇カ国以上回れなどと、少々無理な注文をされた（笑）。弟子はたくさんいるのにそういうふうによく目配りをして色々なお膳立てもしていく。

国分 全部自分できちんとされた。

小田 そう、アフリカへ行くのは大変だからって、外務省へ連れていってかれて、当時の中近東アフリカ局参事官に会わせてくれて、こういうわけなので先々ひとつよろしくお願いしますと、そこまでやってくれるのです。

山田 話題が変わって、少し個人的なことも関わるかもしれませんが、学生時代の思い出の一つは、先生はノートなしで非常に魅力的な講義をされたことです。私は先

生に、「どうしてあんなにうまく講義ができるのですか」と聞いたことがあります。実はノートがないのではなくて、あの頃図書カードがあって、先生はそれに要点だけを書いていたので。

小田 メモはあるんだね。

山田 だけどほとんど見ないのです。これは先生の話の仕方で、筋をしゃべる前にちゃんとつくっておくので、それでよいということでした。授業でもそうだし、先生が塾長とか学部長になられたときの名演説もみな同じやり方だということです。

それから、僕が先生のところに行った頃は、まだ『中国共産党史研究』が出版された直後でした。資料をじっくり読んで、それで論理をつくり上げていく先生の姿をよく見ていました。それからもう一つは、既存の研究をきちんと調べ、批判的にそれを取り入れていくという、論文を書く手法が非常によくわかりました。私などはそれを聴いたり、見ているから、それこそが学問の本道であり、これこそ「研究の実学」であると呼んでいます。そうした学者としての基本的な作法がまだよく見えていた時代がありました。

あと、もう一つ、小此木君が言ったけれど、石川ゼミに入るのは課題が大変でした。

小田 サブノートの作成ね。

山田 私は二月のいちばん寒いときに、小諸の山寺へ閉じこもって、二、三週間でのノートを作成したことがあります。これは私にとっては、自分がかつて若いときに勉強したという意味での、いい思い出になっています。

小此木 私はよく、「小此木さんはなぜ韓国、朝鮮研究を始めたのですか」という、動機について聞かれるのです。これは日本でも韓国でも聞かれます。そのなかには、なぜあんなに早い時期に始めたのかという問いも含まれているんですけど、実はやはり石川先生の影響だったのです。学部の卒論で朝鮮戦争のことを書いたのですけれど、そのときに北朝鮮に関する勉強をしました。ご承知のように石川ゼミの運営というのは卒論中心でやりますから、自主性が無いとどうにもならない。

あるとき私が大学院に行きたいと言ったら、先生が「君、朝鮮の研究をやれ」と言われたのです。僕がそういう関心を持っているというのを知っておっしゃって

れたと思うのですが、あとになってみると、先生の方は先ほど話に出いたように、戦略的に地域圏研究のステージを広げていくというようなことを色々と考えられていたのだと思うのです。その当時私はそんなことはわかりませんでしたから、ちょっと戸惑いました。中国研究をやるうと思っていた人間が、隣にシフトしなければいけないわけですから。ですが、先生に言われたということとを非常に重大に受け止めたのです。何となくその研究をやっていけば自分の道が開けていくような(笑)、そんな印象を受けたんです。それが実はきっかけだったのです。けれどもそのとき先生がもう一つおっしゃったのは、おだてるのが上手なんですね、「君、今やればなあ、ほかの人よりも一〇年早いよ、まだ誰もやっていないんだから。いいからやりなさい、君は第一人者になれるぞ」とこう言われたもので、それで本当にその気になったようなところがあるんです(笑)。

小田 いや、それは見る目があったんだ。

小此木 しばらくしてから今度は延世大学と慶應義塾大学の間に姉妹校関係ができて、留学協定を結ぶから、君すぐ行きなさいと言われて韓国に行った。実質的には、

そこからスタートしたわけですから。

国分 私の場合には、一つはもちろん講義もありますけれど、先生のゼミでの教え方についてです。いま、自分自身が実際になっても確かに忙しすぎると思うのですけれども、当時先生は法学部長をされていた。それで石川先生の個人的な指導という点では、結局ゼミの時間は限られているので、相談したいと電話したら、日曜日に家に来なさいと言う。行ってみたら、もう卒業生がずらりと並んでみんな順番を待っているわけです。結局最後はみんな一緒に会うのですけれども、日曜日の午後、毎週やっていたのではないかと思うぐらいに、色々な卒業生やさまざまな人が御自宅にいられていました。

小此木 授業もやっていたのですね。

国分 もちろん普通の授業もありました。しかし御自宅での印象が鮮烈です。そこで結局、ふだん教室でしか見られない石川先生ではなくて、紺の着物を着られてパイプを吹かした石川先生に、個人指導みたいなことをしていたわけですから。

もちろんそれは自分から積極的に行かないとダメでしたけれども。私が大学院のちょうど終り頃だと思えます

が、二人の学生が石川ゼミを希望していたのですが、ある学則の関係でその二人がゼミに入れないという状況になったのです。先生は塾長だったのですが、その二人の学生を呼んで、単位にならなくてもいいのだったら、とときき家にきて勉強しなさいということを書いて、この二人を塾長で忙しい最中に、数カ月間一回か二回自宅に呼んで個人指導をし、そして卒論を書かせた。ということとでその二人は陰のゼミ生で、記録にはどこにも残っていないわけです。ただ卒業したときに、ゼミ名簿に加えて、今ではゼミの卒業生の一員です。

とにかくゼミは、ほとんどだれも落とさないとというか、希望した学生で自分のところで勉強したいのをどうして落とすのだ、ということはずっと言われていた。ですから意志のある学生に対しては、非常に優しくかったという面がある。大学院などではその指導は本当に厳しかったと思います。ゼミの学生に私たち大学院生がコメントすること自体にコメントしてくるという形で、かなり指導された記憶があります。細かいことですが、今でもよくそこまで気がつくなあと思うことがありますね。塾長の時代だと思えますが、私がゼミの面倒をみて合宿ま



で行くと、石川先生も合宿にも来られていたのですけれど、あとで塾長室に呼ばれていったら、ご自分の合宿の出張費を私にしてくれるとか、細かい配慮までしていただきましたね。そのへんの細かいところの一人ひとりに対する配慮というのを本当にお持ちだったという感じがしますね。

人材をうまく使うということ

山田 あと、塾長とか学部長としての石川先生を見ると面白いところがありますが、そのあたりはどうでしょう。

小田 学部長時代からそうですが、塾長になってからの石川先生の最大の長所というのは、人を上手に使ったことだと思えます。というと言葉は悪いけれども、適材適所をきちんと見抜いて上手にその人を使った。人はみんな限界があるから、自分だけではやれることはたいたしたものではないのです。湘南藤沢キャンパス開設の場合も、ちょっとここは表現が難しいけれども、石川先生はあの二つの学部についてはもしかしたらもっと別のものを想定していたと思うけれど、最後はあのような形

になったでしょう。あれはやはりそういうものを創り上げる能力を持っていると思われる人たちを、上手に使うことができたんですね。

山田 おっしゃるとおりですね。

小田 私も定年後、別の大学の学長をやって、つくづく思うのですが、責任ある立場に立ったときに、いかに人材を上手に見つけてきて、その人材を上手に使うかということが、一番の成功のポイントなのです。わかっていてもそれがなかなかできない。石川先生は実にそこは上手だった、それはもう、一つの才能です。その本人が持っている個々の色々な能力よりも、いま言ったような、どういことができそうな人間かをきちんと見抜いて、それをどのように使っていくかということの能力のほうが実は大事なのです。なぜなら個人でそんなに何でもできる人はあり得ないのだから。石川先生の学部長時代もそうでしたが、塾長の一六年間に、慶應義塾は非常に発展した、「中興の祖」だなどと言われたけれども、その点が、たぶんそういう評価を勝ち得た最大の根源というか、ポイントだったのではないかと思います。

山田 先生のやり方を見ていて、小田さんの言われた

ことには本当に私も同感です。藤沢の二学部を先生が全部細かく設計されたわけではないのです。私も小田さんも準備委員会にいたのですが、あそこへ色々な人々を呼んで、まずみんなに勝手なことを言わせるんですね。そして先生は、意味があるものは徐々に取り入れていかれるのです。そして最後に、ここは先生の上手なところですが、大体学校の先生って自説を展開するから話が膨らむわけです。そこで先生は、「だけど君、それは財政的にできないよ」とかなんとか言って、最終的には自分の考える方向に持っていってしまう。

もう一つ、ここでは松本三郎さんの役割について言っておいたほうがいいと思います。つまり松本さんは石川先生と勝手なことを言うわれわれの委員の間に入って、いろいろな意見を受け止めておられた。

小田 松本さんはあのおき担当理事だったから。

### 学生運動の時代

山田 そう、担当理事でした。勝手なことを言う教員の意見を受け止めながらも、松本さんも辛かっただろうと思います。そこがあの人のお偉いところですよ。彼がいた

からこそ準備委員会が崩れなかった、大きな理由のひとつだと思っています。

それから、一九七〇年代のはじめというのは、ちょうど学生運動が盛んなときで、いまと違って教授会は教授だけからなっていました。で、われわれは助教授であつたけれど、助教授だって学生運動が起こると最前線に立たされました。けれども教授会になると何も言うことができないのです。これはけしからんというので、あの金子晃さん、栗林忠勇さん、根岸君などが、私を含めてその頃「四人組」という言葉はありませんでしたが、教授会解体の主張をしました。そうすると後に石川先生は学部長として根岸君と私だけを呼ぶわけです。「君たちなんだ、ああいうことを言っては困る」というようなことで怒られるわけです。こつちも「はあ」と言って、そのときはごまかして逃げてきて、また教授会解体ということを書いていました。

小田 譲れないところはあるのだろうけれど、上手に譲るところは譲っていた。

山田 もう一つだけ、先生について重要なことにつけて加えておきたいのは、七〇年代はじめに学生運動があつ

たことです。先生が当時常任理事だということで、先生が先生の研究室に入って消火器なんか撒いて、本をめちゃくちゃにしてみましたのです。先生が一番がっかりされたのは、みず書房の『現代史資料』をずっととおられたのですが、これが全部ダメになってしまったことです。これには先生は本当にがっかりしました。とを言われて、そういう表情をしておられました。

小此木 学生が本に手をつけたというのを、怒っておられましたね。

### 石川先生の遺産と今後の法学部

国分 それでは最後のところに入りたいと思います。石川先生の築かれた遺産を踏まえながら、これから何を法学部に期待するかということでお願いいたします。

小田 法学部への期待というと、もう期待以上の発展ぶりだと思うけれども……。ただ、今の法学部の原型というのは、大卒でいうと石川学部長時代にできた部分が多いのだから、あとはその上を勢いに乗って走ってきたという感じがします。私などはいまあまり関わりがないので、現状のことをよく知りませんから、とくに期

待の言葉など言わなくても、もうこのままの勢いで行くだろうという気はします。ただ、非常によいことの一つは、悪い意味での純潔主義にもうこだわらなくなっている、そのことは非常によいことだと思います。昔のように先生がたとえば、自分の目の届く範囲にいる人間に声をかけて大学に残すとか、それで成功してきた面もあるけれど、限界もある。しかし近年、そうでは必ずしもない形で、新しい人材のリクルートをするようになってきた。

国分 とくに小田先生や山田先生のおられた時代に、地域研究の関連の人事のときに、とにかく日本でその分野の関連の研究者リストと論文を全部集めて勉強会をやって、そのなかで誰が一番優秀だったかということを含んで話し合い、そして面識もないので、本人を呼んできて研究会をやるという形で採用に踏み切っていく、こういうプロセスをやったことがありましたね。

小田 それと、慶應義塾に期待ももちろんあるのですけれど、単に慶應義塾だとか、法学部だとかという狭い範囲だけではない思考が大事です。われわれは研究・教育の分野ですからその世界の人たちだけに限ってもいい

のですけれど、慶應義塾で育った人たちが他の大学、研究機関等において、慶應義塾の発展に間接的に貢献しているのだと思います。ですから、塾内の人間だけではなく、そういった人たちの貢献度というのも評価しなければいけないし、これからもそういう人たちに期待をしなければなくてはいけないのではないかと思うわけです。その意味で、慶應育ちの研究者で構成される慶應法学会の存在意義は大きいですね。

国分 的確なご指摘ありがとうございます。また、実際塾外から来られた方でも、慶應大好き人間になった先生方も現在もうたくさんいらつしやるわけですから、これもみんな慶應の力だと言えますね。山田先生、何かございますか。

山田 私はもう現役を離れていますから、具体的にどうするかというのは現役の人に考えてもらい、実行してもらいたいと思います。ただし、この間、六月二八日の慶應法学会と共催した法学研究所の開所式、実は政治学科しか出席していないのですが、あれはよかったと思っています。なぜかという、現役の人たちが、政治学でも法学でもよいのですけれど、いま直面している研

究・教育上の問題を将来に向けて確認しておく必要があると思うのです。今年二〇〇八年は、ちょうど政治学科創立一〇〇年の年です。私は一〇〇年目のとき、それが妥当かどうかは別として、学部長として政治学科に五つの課題を提起して去りました。私はこの間の会議出席して、その五つの課題がどのように実現されているのか、あるいは皆さんがどういう新しい問題を出してくるのかということを見ていたわけです。だからそういう意味では、学部長でも研究所の所長でもいいのですが、法律も政治も一〇年ぐらいの範囲で、いま直面している課題と将来の展望を、過去のもののできるだけすり合わせながら考えていってもらいたいと思ったのです。そういう意味でこの間の土曜日の報告会は面白く聴きました。

国分 あの日は法律のほうも同じようにとても面白い議論でした。

山田 ですから、あの場でしゃべっただけでなく、それを残しておく必要があると思います。『法学研究』にこの間の会議の記録として、そういう項目を設けてもいいのではないですか。

国分 本日は本当にありがとうございます。石川先

生の追悼ということではありましたが、同時に慶應義塾  
大学法学部、とくに政治学科や、地域研究を中心とした  
研究のあり方というか、それがどういう経緯でつくられ  
てきたのか、そして、同時にそれが慶應義塾や日本全体  
のなかでどのような意味をもつのか、というような大き  
な議論を展開してまいりました。もちろんそこで確認で  
きることは石川先生の研究と教育における大きな足跡と  
いうことでありますが、しかし、その遺産に甘えること  
なく、そうしたものを土台にして、新しい法学部の、今  
後の糧にしていきたいというふうに考えております。  
ということでは今日はお忙しいなか、先生方にお集まり  
いただきまして、本当にありがとうございます。

(了)

(平成二十年七月四日)